

マタイの福音書 11 章 28 節～30 節をお開き頂きまして、まず冒頭に通してお読みします。『<sup>28</sup>すべて、**疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。**<sup>29</sup>わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。<sup>30</sup>わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。』

“すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。”と語っておられるのは、イエス・キリストであります。イエスのところに来れば、休ませてあげますと約束されております。連日の猛暑で記録的な夏日が続いております。熱帯夜も続いて、なかなか夜も眠れないという人もいるかもしれませんが、ちょっと今日は夏バテ気味ですと、朝起きるのもしんどかったです、という人もいるかもしれませんが、あなたは今疲れているかどうか。言われるまでもなく「私は疲れてます。」と言う人もいれば、その疲れにまだ気付いていない人もいるかもしれません。私たちの体は実は年中無休、24 時間営業しております。

一日平均心臓の拍動数 103,689 回と言われております。これは平均ですから、もっと多い人も、少ない人もいると思いますが、心臓は 7200 リットルもの血液を絶えず私たちの体全体に循環させてくれております。で、その距離はなんと 2 億 7 千 31 万 2 千 km にも及ぶと言われております。あなたの小さな心臓が、あなたの血液を 2 億 7 千 31 万 2 千 km も循環させてくれているということです。それは地球一周約 4 万キロとするならば、6760 周に相当します。凄いですね。想像もつきませんが、毎日あなたの血液は地球を 6760 周も回っているということです。で、あなたの肺は平均 2340 回、一日呼吸しております。1200 リットルもの空気を吸入しているわけです。胃袋においては約 1.6kg の食物、3.3 リットルもの水分を取り込んでおります。で、私たちがよく使う口でありますけれども、男性であるならば一日 4800 語、女性であれば 7000 語近く話すと言われてます。これも平均ですから、もっと話す人もいると思いますが、それでも女性が疲れないのは不思議であります。日常生活では 750 もの筋肉を動かして、700 万個の脳細胞を使っております。だから人は慢性的に疲労気味でも不思議ではありません。

今日は日曜日ですが、明日は月曜日。「もうそれを考えるだけでブルーになります。」という人は、もうブルーマンデー症候群に陥っているかもしれません。明日から仕事と思うだけで、何かもう疲れ気味、だるいとか、嫌気がさすとか、そういう人もいるかもしれませんが、日本は世界でも類を見ない滋養強壮剤の消費国でもあります。“ファイト一発”とか“元気ハツラツ”とか、いろいろありますけれども、しかしどんなに休んでも、どんなにこの滋養強壮剤を欠かさず毎日飲んでも、決して取れない慢性疲労というのがあります。こうした疲労の原因というのは、身体的なことだけじゃなく、もっと奥深い理由があるかと思われれます。医学的にも疲労が起こる生理的な変化というのは、未だ持って解明されておられません。どうして人間は疲れるのか。現代の最新の医学をもって、その原因が分からないとされております。その方法も確立されておられません。疲労度というものを測る尺度・ものさしというものはまだ発見されていないということです。疲労というのは本人の自覚症状で判断するしかないからです。同じことをしていても、ある人は疲れやすい。すぐに疲れてしまう。そういう人もあるわけです。つまり疲労というのは感覚若しくは精神という体ではなく、私たちの心で感じ取るものだということが分かります。疲労というのはむしろ体よりも心で生じるものだということが分かるわけです。

マタイ 11 : 28 のお読みしたイエスの招きの言葉であります。『すべて、疲れた人、重荷を負っている人

は、わたしのところに來なさい。』という招きの言葉ですが、その中で“**疲れた人**”と言われている言葉、これは皆さんのお手元の**新改訳聖書**ですと、\*印がついています。欄外に「**疲れ果てた人**」というふうに訳があります。ただ**疲れた**というよりも、“**疲れ果てた人**”です。新約聖書は元々ギリシャ語で書かれていて、そのギリシャ語の原語ですと、この“**疲れた人**”は、“コピアオー” kopiaō と言います。“コピアオー”というのは、正に**疲れ果てた状態**、**疲れてもう気絶しそうだ**という状態を表しています。これは**肉体疲労**よりもさらにひどい**疲れ**を表す言葉です。精魂尽きてしまって途方に暮れた**疲れ**、もうこれ以上はやっていけないという**疲れ**、もう立ち直れないと感じてしまう**疲れ**です。聖書はそのような**疲れ**を次のようにも表現しております。それは旧約聖書の**箴言 18:14**に書かれている言葉です。『**人の心は病苦をも忍ぶ**。(病氣や苦しみをも忍と。耐えると書いてあります。)しかし、**ひしがれた心にだれが耐えるだろうか**。』どんな大病をしてもまだそれは耐えられる。でも、ひしがれた心にはだれも耐えられないと、言っているわけです。真夏で夏バテという**疲れ**もありますけれども、でも、もう生きることに**疲れてしまった**、という**疲れ**もあります。親に捨てられたことを一生思い悩み続ける**疲れ**や、子供が道を外してしまった時に親が感じる**疲れ**だったり。または親友に裏切られ、家族に見捨てられ、誤解された時に感じるような**疲れ**。夫や妻、その伴侶に拒否されて、傷つけられた時に感じる**疲れ**。<sup>はため</sup>傍目には**順風満帆**<sup>じゅんぷうまんぱん</sup>であったとしても、見た目には誰の目にも人生で成功しているように見えたとしても、人生そのものに**疲れて**しまって、ついには自殺する大金持ちも大勢おります。お酒やタバコや麻薬やギャンブルに溺れた生活にもう自分は**疲れて**しまった。もう、常に逃げ回る犯罪生活に**疲れて**しまった。いろいろな**疲れ**があるかと思います。医者でも偉人でもこうした言いようのない**疲れ**を癒やすことが出来た人、これは過去においても現代においてもひとりもおりません。

しかし、ここに人類史上初にして唯一例外があります。それが私たちの信じる神、唯一まことの救い主イエス・キリストであります。そのイエスが『<sup>28</sup>**すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに來なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます**。』と。今あなたにも、目には見えませんがここにイエスはおられて、この言葉をあなた個人にも語って、あなた個人を招いて下さっております。もし、あなたが自分のもとに誰かを招きたい、招待したい、お家に呼びたい、という時には、そのような**疲れ果てた人**、**元気のない人**、**落ち込んでいる人**、もう嫌気がさして何もかも嫌になっちゃった人、もう一歩も歩けませんみたいな人を、あなたは喜んで「家に飯でも食べに來ませんか。」みたいなことを声をかけるでしょうか。今にも倒れそうな、病んでいて、傷ついていて、落ち込んでいる人を招くでしょうか。そんなことをしたら、自分もまたブルーになってしまう。むしろ、すべて幸せな人、ハッピーな人、私と共に人生を明るくパッと謳歌して楽しみましょと、私たちは考えないでしょうか。すべての億万長者よ、あなたがたの財産を私と分かち合い、贅沢三昧にハッピーに暮らしましょと、楽しみましょと、あなたは言わないでしょうか。普通求人広告には「**元気でやる気のある、エネルギッシュな若者大募集**」とか書くわけですが、イエスの場合は「**疲れた人、急募**」考えられない招きであります。イエスの招きの言葉は尋常ではありません。イエスの招きは、すべての**疲れた人**に向けられます。実は、このマタイの福音書 11 章を読んで頂くと、今終わりの言葉だけ見ているだけですが、全体を読んで頂くとこれまで神の民と言われる、神に選ばれた民、選民とも呼ばれますが、そのイスラエルに対してイエスは招きをなされたんですが、その選民のイスラエルは、そのイエスの招きを拒みました。拒否したんです。ですから、これまで選民イスラエルは拒否してきたわけですが、イエスはここで、**疲れた人**こそが私の民である。今**疲れ果てて**しまった人、**精根尽き果てた人**、もう一歩も前に進めませんという人。その人に今招きをなさっているということです。

で、聖書の中に**疲れ**に関する具体的なお話も、物語も出ていますので、ひとつだけご紹介したいと思います。それは**出エジプト記**というところに記録されている物語です。**出エジプト記**というのは、旧約聖書

の最初から 2 番めの書です。“エジプトを脱出する書”という意味ではありますが、イスラエルという民族は最初飢饉を理由に約束の地を離れて 400 年間エジプトの繁栄の地に食料避難しまして、そこで当時世界最強の、最大の国であったエジプトの栄華を味わったわけです。その物語は皆さんもよくご存知なので、割愛させていただきますけれども、そのきっかけとなった人物がヨセフという人物でありましたが、そのヨセフのことを知らない新しいエジプトの支配者、パロと聖書は読みますが、一般的にはファラオとして有名です。そのパロ若しくはファラオが出現しますと、事態は一変します。それまでは世界最強の国エジプトで、今日で言えばアメリカのような国で、イスラエルの民はその栄光栄華を享受していたわけです。ところが指導者が、王様が替わってしまった瞬間、大統領が替わってしまった瞬間、生活は一変してしまっただけです。その新しいパロ、新しいファラオは、移民として入ってきたイスラエルの民がどんどん人口が増え、勢力を伸ばしてきたので、その脅威を感じて彼らを抑えつけ、支配するために、奴隷として過酷な労役を課しました。その過酷な労役、重労働というのが、レンガ作りでありました。炎天下のもと来る日も来る日も、全部手作業でレンガを作らされるわけです。それがエジプトの巨大な建造物にも使われたわけです。ピラミッドなどはその一例であります。記録に拠りますと、どれほどのレンガをイスラエルの民は強制的に作らされたのかと言いますと、高さ 3m 厚さ 1.5m の壁がアメリカのロサンゼルスからニューヨークまで。これはアメリカ横断の距離です。約 4800km です。日本を縦断すると往復しなければいけない距離であります。その長さに延びる量のレンガをイスラエルの民は作らされたと言われてます。膨大な量です。ちなみに万里の長城は全長約 6000km と言われてますけれども、アメリカを横断する距離約 4800km、それは高さが 3m、そして厚さが 1.5m の壁となる程の量でした。

で、この“**疲れ**”という言葉がギリシャ語で“コピアオー”として見てきたわけですが、今お話した**出エジプト記 5 章 7～9 節**の中に実は“コピアオー”という言葉が使われているんです。ただ、旧約聖書はヘブル語若しくはヘブライ語で書かれているんですけども、それをギリシャ語に訳したバージョンに、このギリシャ語の“コピアオー”という言葉が使われている箇所が、**出エジプト記 5 章 7～9 節**に登場します。そこでは、新改訳聖書では“**労役**”というふうに訳しています。“**労役**”という言葉はギリシャ語訳の聖書ですと“コピアオー”という単語となっております。ですから、正にエジプトで立ち往生して、そこからもう抜け出せること無く、一生涯このパロのもとで奴隷として生活しなければいけない。炎天下のもとで明けても暮れても、同じレンガ作りを強いられる。そのような疲れにあなたも共感できるでしょうか。明けても暮れても同じような作業の繰り返し。それを強制されて、そうしなければ生きていけない。「自分には明るい未来はあるのだろうか。一生涯こんな生活を続けなければいけないのだろうか。」そのように疲れちゃっている人もいるかもしれません。それとも、この中にもいるかもしれませんが、「私はエジプトに行くんだ。」と。「出世するためには労役すら厭われない。金持ちになるために、成功するために、物質的な豊かな生活を送るためには、自分はどんな苦勞だって耐えてやる。」と、そういう人もいるかもしれません。確かにしばらくは目的を持ってそうしたハードワークも、労役も、耐えられるかもしれませんし、むしろ楽しいとも思えるかもしれません。でも、新しいパロが出現して事態が急変したように、あなたがそれまでは楽しんでいたものが、ある時から急に面白くなくなるわけです。ある時から急にあなたを縛りつけるもの、あなたにプレッシャーをもたらすもの、あなたを鞭打ち奴隷とするような事態に陥ってしまうという危険があることを覚えて欲しいと思います。「これさえ達成すれば。この資格を得ることが出来れば。この目標に達すれば。このノルマをこなせば。この仕事に就ければ。あの大学に入れば。あれさえ手に入れば。これさえ手に入れば、自分は幸せになれるに違いない。」と。「絶対に成功するんだ。絶対にこれで自分は満足するんだ。」と。「そのためには一生懸命努力して、どんな犠牲も惜しまずに働き続ける。重労働だって構わない。奴隷のようにこき使われたって構わない。」でも、いつかそうしているうちに気付きます。「こんなはずじゃなかった。」最初は意気揚々として「絶対に成功してやる。どんな苦勞だって耐えて

みせる。」意気込んでいたのに、いつの間にか「こんなはずじゃなかった。政府が、社会が、会社が自分に約束したことは違った。コマーシャルが約束したことは違った。新聞や雑誌やインターネットが約束したものは違った。映画やドラマが約束したものは違ったんだ。」というその現実に失望し、落胆し、幻滅し、「一生懸命頑張ったのに。惨めだ。もう疲れ果てた。もう嫌になっちゃった。」と。

最近では小学生でも、よく“疲れた”という言葉を使います。私にとってはちょっとショッキングな話です。私が小学生の頃は、もう疲れ知らずでした。もうエネルギーに満ちあふれておりました。疲れたなんて微塵も思ったことないです。疲れたと思う前に寝てましたけれども。でも、最近の子供たちは口癖のように「疲れた。」小学生が。これもどんどん低年齢化していくと思います。非常に残念なことです。もちろん肉体的にも疲れるといふこともあると思います。御飯を食べていないからとか、夜中まで起きていて朝食も食べなかったので学校で眠くて眠くてもう疲れちゃった、というのもあると思いますけれども、でも実際には心があまりにも虚しくて、寂しくて、疲れたと。それが幼い子供たちが心痛の叫びとして発しているのかもしれない。

もちろん子供だけじゃありません。大人も疲れます。育児不安、育児ノイローゼ、「もうやっていけない。この先子供をどうやって育てたらいいのか。」又は「十代になってしまった大きな反抗児をどうやって自分はコントロールしたらいいのか。もう手がつけられない。命の危険すら感じる。キレたら何をするか分からない。」年寄りでも最近のニュースでは驚くような凶悪犯罪を犯します。カッとして70代とか、80代のおじいちゃん、おばあちゃんが人を殺す。しかも自分の家族を殺す。孫にも手をかける。恐ろしい時代です。

皆疲れてしまっておりま。皆重荷を負ってしまっておりま。皆ストレスでいっぱいになってしまっておりま。精神も病み、心も病んでおりま。イエスは、すべての疲れた人、(例外はありません。)すべての、(どんなありとあらゆる種類の疲れがあろうかと思いますが)、すべての疲れた人に対して招きの言葉をあなたにも語って下さっておりま。あなたは、エジプトの王パロはペテン師で、エジプトという国が騙しものであることに気付く必要があります。この世が約束していること、あなたにうまい話を持ってきて、美味しい話を持ってきて約束している人、必ずしもそれらは本当にあなたを助けてあげたいというよりもむしろあなたを利用して食べ物にしようとする甘い誘惑かもしれません。

聖書においてエジプトというのは、実は“この世”の象徴であります。“この世”というのは、『罪の世界』と言われております。イエス・キリストを神として認めない、そして現世利益だけを追求して。また、そのエジプトの王となるパロは、この世の支配者、聖書はその者を“悪魔”とか“サタン”と呼びます。その象徴としてエジプト、そしてパロは描かれております。悪魔は、サタンは、物質的な幸福というものを約束します。いろいろな人や物を使うわけですが、あなたの魂を代償に狙っております。『サタンに魂を売り渡す』なんて言い方もありますけれども、この世での成功、この世のありとあらゆる快樂、自己実現というものを約束しながらも、最終的には罪の奴隷にすることがこの世の支配者、悪魔・サタンの狙いでもあります。目的であります。そのことも覚えて欲しいと思います。

そして、『重荷を負っている人』という話に今度は移っていきたいと思いますが、じゃあ、重荷とは一体何だろうか。それはあなたが背負う脂肪のことではありません。最近体が重いなど。メタボ検診で引っかかる人もいるかもしれませんが、そのような重荷ではなくて、ギリシャ語ではこの“重荷”というのが“フォルティゾー” phortizo と言います。“フォルティゾー”というのは、“フォルトス”という言葉から来てるんですが、“フォルトス”というのは、“船の貨物”、“船の積荷”、いわゆる“カーゴ”にあたります。それが語根となっています。ですから、“重荷”という言葉、ギリシャ語の“フォルティゾー”というのは、“荷を積み過ぎ”、よくトラックなんかでも荷を積み過ぎている荷重オーバーのものがあります。負担のかけ過ぎ、オーバーロードというのがその意味であります。“過剰な重荷”、“私たちを押し潰してしまうもの”、

それが“フォルティゾー”の意味であります。同じ言葉が、“フォルティゾー”という原語がルカ 11 : 46 にも使われています。『しかし、イエスは言われた。「あなたがた律法の専門家たちも忌まわしいものだ。あなたがたは、人々には負いきれない荷物（この“負いきれない荷物”というところの原語が“フォルティゾー”です。）を負わせるが、自分は、その荷物に指一本もさわろうとはしない。』イエスがいわゆる宗教家の人たちを非難しています。「あなたがた律法の専門家たちも忌まわしいものだ。あなたがたは、人々には負いきれない荷物（“フォルティゾー”）を負わせるが、自分は、その荷物に指一本もさわろうとはしない。」その“負いきれない荷物”というところが“フォルティゾー”ですから、重荷というのは正に自分自身を押し潰してしまうほどの負いきれない荷物というふうにイメージして頂きたいと思います。天下人の家康も「人の一生は重荷を負うて遠き道を征くが如し。」という言葉が漏らしておりますけれども、確かに生きることは疲れます。

聖書は、重荷とは何かというものも実はハッキリと伝えてくれています。イザヤ 1 : 4~6 を参照してみたいと思います。これは神様が、主と呼ばれる神が、イスラエルの民に対して語っている言葉です。『<sup>4</sup>ああ。罪を犯す国、咎重き民、悪を行なう者どもの子孫、墮落した子ら。彼らは主を捨て、イスラエルの聖なる方を侮り、背を向けて離れ去った。<sup>5</sup>あなたがたは、なおもどこを打たれようというのか。反逆に反逆を重ねて。頭が残すところなく病にかかり、心臓もすっかり弱り果てている。<sup>6</sup>足の裏から頭まで、健全なところはなく、傷と、打ち傷と、打たれた生傷。絞り出してももらえず、包んでももらえず、油で和らげてももらえない。』続きもございしますが、正に主なる神は、イスラエルの民に対して、「あなたがたは霊的に傷ついてしまっている。病を患い、滅びようとしている。」と。その理由は、その原因は、「あなたがたが罪を、罪という重荷を負っているからだ。」と言われてます。パロは、この世の支配者悪魔は、あなたを疲れさせ、罪はあなたの重荷となります。

罪が重荷となるということについては、詩篇 38 : 3~8 にも如実に描かれております。これはイスラエルの王様、ダビデが書いた詩であります。『<sup>3</sup>あなたの憤りのため、私の肉には完全なところがなく、私の罪のため私の骨には健全なところがありません。<sup>4</sup>私の咎が、私の頭を越え、重荷のように、私には重すぎるからです。<sup>5</sup>私の傷は、悪臭を放ち、ただれました。それは私の愚かしさのためです。<sup>6</sup>私はかがみ、深くうなだれ、一日中、嘆いて歩いています。<sup>7</sup>私の腰はやけどでおおい尽くされ、私の肉には完全なところがありません。<sup>8</sup>私はしびれ、砕き尽くされ、心の乱れのためにうめいています。』ここにも、重荷は罪の結果としての苦悶、葛藤、罪悪感、罪責感として表現されています。拭いきれない、引きずった過去が、重くのしかかってくると、言っているわけです。この世の支配者パロ、すなわちサタン、悪魔のメンタリティーに、この世的な価値観にすっかりと魅了されて、すっかりとそれにハマってしまって、この世のために、自分のために働いたけれども、それは骨折り損のくたびれ儲けであったと。結局最後に残ったのはレンガと疲労感と罪の重荷であったというのが、私たち多くの現実であろうかと思えます。

しかし、イエスはそんな重荷を背負う私たちを招いて下さっております。『すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。』と。どこに来なさいと言っているのでしょうか。“わたしのところ”と言っています。疲れた人は、重荷を負っている人は、教会に行きなさい、とは書いてありません。わたしのところに来なさい。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、説教を聞きなさい。」とも言われておりません。または、「カウンセリングやセラピーを受けなさい。本を読んだり勉強しなさい。ああしなさい、こおしなさい。」とは言われませんでした。ただイエスは「わたしのところに来なさい。」“ただ来なさい”です。これも有り難いです。“走って来なさい”ではありません。“ただ来なさい”です。疲れていてはとて走れません。よろめきながらでも、這いつくばりながらでも、どんな格好でもいいから、イエスのもとに来ればよい、ということでもあります。もちろん疲れたままで、重荷を負ったままで、罪を背負い込んだままでも構いません。ありのままでいい、と言っています。スーツ姿で、一張羅でイエスの前に

出ていなくても構いません。普段着でいいと言ってるわけです。ありのままのあなたでいいんです。繕うことはありません。重荷を負ったままで構いません。罪を片付けてから、自分で自分の過去を精算してから、自分の罪の生活から足を洗ってから、来なさいとも言われていません。立派なクリスチャンになってから来なさいとも言われておりません。魚というものは捕まえてから水で洗うものです。水で洗ってから魚を捕まえるなんてのは、ナンセンスな話です。イエスはありのまま、疲れたままで、重荷を負ったままで来なさいと、招いておられます。もう、パロのくびきのもとでは働いてはならないと。疲れてしまうから、休むことは出来ないから。むしろ、イエスは言われます。「わたしのくびきを負いなさい。」と。

テキストの**マタイの福音書 11 章 29 節**に戻って欲しいと思います。「わたしのくびきを負いなさい。罪の重荷を負ってはなりません。」と。「それはあなたの生きる気力を消耗させてしまい、人生を浪費させてしまうものだから」と。むしろ「わたしのくびきを負って、わたしから学びさい。」とイエス・キリストは具体的にどうすべきかということも伝えてくれております。それが**マタイ 11 : 29**の言葉です。「もうパロやサタンのメンタリティーに騙されてはならない。縛られてはならない。それはあなたに重くのしかかり、心の安らぎを奪い去ってしまうからだ。」と語っています。

で、ここで『休ませる』という言葉も学んでいきたいと思いますが、『休ませる』という言葉の原語、ギリシャ語は“アナパノー” **anapano** といって、その元々の意味は“再び止める”“作り直す”“やり直す”という意味であります。そこから転じて、“平穏である”“安心である”“休養”“元気”英語で言えば“リフレッシュ”という言葉です。英語の“リフレッシュ”という言葉は、“リ”という言葉と“フレッシュ”という言葉から成り立っています。“リ”といのは“繰り返す”“何度も何度も”、そして“フレッシュ”ですから、“何度もフレッシュにされる”と。それが“やり直す”というニュアンスでもあります。イエスはどうやってあなたを休ませてくれるのでしょうか。それが、今言った**マタイ 11 : 29**の「わたしのくびきを負うことによって、あなたは休むことができる。」と。『くびき』とは一体なんなのでしょうか。漢字で書くと分かりやすいですが、『くびき』というのは、“首”という字に“木”と書きます。これは二頭の牛の首を横木で繋げて、荷物を引かせたり、畑を耕すときなどに使う道具のことを指します。聖書では、イエスは大工の息子と呼ばれています。イエスの育ての親、イエスには実の父親は地上にはいませんでした。イエスのお父さんは天の父です。でも、イエスはヨセフという人に、養父に育てられました。その養父が大工だったので、大工の息子と呼ばれるんですが、大工といっても建築家ではなくて、むしろ木工技術者、家具職人のような大工でありました。伝説によりますとヨセフという人は、くびき作りを得意とする職人、エキスパートであったと言われてます。そのヨセフの工房の看板には、『最高品質のくびき製作』と銘打ってあったとも言われております。これは聖書に書かれていないことなので断言は出来ませんが、そういう伝承が残っております。大工というのは、くびきを二頭の牛にピッタリフィットするようにオーダーメイド、カスタムメイドで作ります。牛のサイズを細かく測って、そして二頭の牛のうち一頭がリードをする牛となります。もう一頭は、ただついていくアシスタントの牛の役割を果たします。ですから、必然的にリードする牛の方に重量がかかります。そのような作りをするわけですが、アシスタントの牛はただそれにくっついていけばいいという状態に仕上げます。ですから、イエスは暗にこう言われているんです。「わたしがリードする牛になろう。」と。「わたしの引くままに、あなたは身を任せれば、それでよい。」と。「自分が引こうとして、自分に重荷をかけてはいけません。」と。「あなたは行き先を模索して、あちこち迷って探さなくてもよい。わたしの行く道をあなたは変えてはならない。わたしはあなたの神、主である。天地の造り主、全知全能の神である。」とおっしゃってるわけです。**詩篇 68 : 19**にも神の言葉が記されているんですが、『ほむべきかな。日々（毎日）、私たちのために、重荷をになわれる主。私たちの救いであられる神。セラ』そんな神様は、この他にこの世に存在すると、あなたはお思いでしょうか。“牛に引かれて善光寺参り”と言われますけれども、実際にはイエスが私たちを引いて、リードの牛となって、イエス

が私たちのすべての疲れ、重荷を背負い込んで下さって、あなたを休ませる。あなたの重荷を負って下さるような神は、この世には他にはおりません。

そして、イザヤ 28:12 もお読みします。『主は、彼らに「ここにいこいがある。疲れた者をいこわせよ。ここに休みがある。」と仰せられたのに、彼らは聞こうとはしなかった。』“ここにいこいがある。”ここに休みがある。ここが休憩所だと、神は言われてるんですが、しかし、多くの人はその招きを聞こうともせず、その招きに応えようとしなくて、拒否したわけです。「わたしのもとに来なさい。」これはまるでイエスが私たちにプロポーズしているような言葉でもあります。実は聖書では、イエス・キリストを信じる教会は、“キリストの花嫁”とも呼ばれていますから、正にこれは、花婿イエスからのプロポーズの言葉と言っても良いと思います。「わたしのところに来なさい。」プロポーズの言葉です。主イエスは、オーダーメイドの、カスタムメイドのバランスのとれたくびきのように、私たち一人ひとりにピッタリの人生、じっくりくる人生を与えて下さいます。今、生きていて何か落ち着かない。ギクシャクして、何か首をかしげてしまう。そういう感覚をあなたはお持ちでしょうか。納得がいかないような気がしていないでしょうか。そんな人生から、イエス・キリストはあなたを解放してくれます。何か背筋が曲がっていて、いつも下を向いているような人生。体がなんか全体がだるいようだ。ハリがない。そう感じる人生からもあなたは解放されます。または背伸びばかりをして肩が凝ると。もう首が回りません。という感覚を持っている人もいるかもしれません。そういう人生からも解放されます。一生懸命頑張っているのに、全然前に進みません。そういう人生からも解放されます。生き生きと水を得た魚のように、あなたはイエスの招きに応えることによって、あなたにピッタリの本当に満足のいく、じっくり来る喜びに満ちた人生を送らせて頂けます。

で、もう一度テキストの方に戻って頂いて、マタイ 11:29 のところですが、イエスのご自分のことを『わたしは心優しく、へりくだっている』と自己紹介しています。これは特筆すべきことなんですが、イエスがご自身の性格について述べる唯一の箇所です。イエス・キリストとはどういう方か、自己紹介している箇所はここだけです。『わたしは心優しく、へりくだっている』これが私たちの信じる神です。「わたしは力強く、偉大であるから、わたしから学びなさい。」と上から目線でものを言っているのではありません。イエスは、短気で、傲慢で、ふんぞり返って、亭主関白のように「俺について来い。」というようなタイプではありません。もちろん亭主関白どころか、イエスは天地万物を造られた神。主の主、王の王でありますから、イエス以上に偉い方はもちろんいないわけですが、そのイエスが「わたしはへりくだっている。わたしは心優しい。」とおっしゃってます。で、この“心優しい”という言葉も原語で紹介しておきたいと思います。ギリシャ語は“プラオス” *praios* と言って、これは“柔和” *meekness* というふうにも英語で訳されます。“柔和”と“柔弱”は違う言葉です。“柔弱”というのは“貧弱”とか“軟弱”という意味でありますけれども、“柔和”というのはイメージとしてはすこし弱々しいイメージがするかもしれませんが、原意というものは、“プラオス”の元々の意味は、『制御されている、コントロールされている力、内に秘めた力』を意味します。全知全能の神がイエスというお方ですが、そのお方は心優しいんだと。“プラオス” 柔和であると。力があるのに、それを敢えて誇らしげに前面に出さずに、むしろそれを抑えるようにして、弱いものにも優しく接して下さるような。ちょうど大型犬と小型犬が仲良くじゃれ合っているようなその姿をイメージして欲しいと思います。または、親と小学生くらいの男の子がプロレスごっこをしているようなイメージでもいいと思います。まさか小学生の息子と本気になって大人のあなたがプロレスをするはずがありません。子供の方は一生懸命本気でやるかもしれませんが、大人はそれを押さえているんです。楽しいように、怪我をしないように遊んであげるわけですが、そういうイメージが良いと思います。制御されている、コントロールされている力、内に秘めた力。それが“プラオス”。この、“心優しい”という言葉の原語であります。

で、“プラオス”の反対語は何であるかということ、“怒りっぽい”“気性が荒い”“すぐにブチ切れる”短気ということです。ですから、心優しい人というのは、言い換えれば“怒りっぽくない人”“気性の荒くない人”それがイエス・キリストであります。有り難いですね。

で、“へりくだっている”の原語はギリシャ語で“タペイオス”tapeinos と言うんですが、その直訳は単に“低い”。イエスは低い方。態度が低いと言う場合は、これは“へりくだり”、すなわち“謙遜”という意味になります。イエスと言うお方は、この福音書を見て頂くと、正に心優しく、へりくだっている、低い方だということは一目瞭然で分かります。イエスは子供とも楽しく過ごすことが出来ます。子供を抱き抱えて、どんなに忙しいときでも、子供を無視したりはいたしません。また、イエスは当時社会の底辺で人々から忌み嫌われていた税金取り、取税人と呼ばれる人たち、または遊女、娼婦、現在で言えば風俗嬢とか、または罪人と呼ばれる犯罪者たち、元犯罪者、社会では日の目の当たらない人たち、そういう人たちともイエスは楽しく食事をいっしょにとりました。社会では底辺で、人々からは忌み嫌われて、距離を置かれてしまう、レッテルを貼られてしまう、そういう人たちも、イエスとならば気兼ねなく安心して威圧感を感じることなく過ごすことが出来る。それがイエス・キリストというお方です。だから、低いんです。どんなレベルにもイエスは合わせて下さいます。イエスは疲れている人、重荷を負っている人には、恐れや威圧感を与えない方だということが分かります。あなたがこのイエスのもて行く時には、イエスはあなたを見下したり、馬鹿にしたり、非難したり、さばいたり、怒ったり、ブチ切れることはありません。これが私たちの花婿イエスです。あなたの花婿はどうでしょうか。すぐにブチ切れますとか。うちの亭主は気が短くて。あるかもしれませんが、イエスは私たちの心優しくへりくだっている花婿です。そしてあなたの夫もそうなるべきであります。

で、**マタイ 11:29**でもう一度『**わたしから学びなさい。**』という言葉にも目を留めて欲しいと思います。**わたしから学べ。**教科書から学べ、ではありません。**わたしから学べ、**ということは、イエスがまず私たちに模範を示して下さっているということです。手本があるということは、有り難いことです。「そんなことは、分かりません。知りません。学んだこともありませんから。」と言って、いきなりマニュアルを渡されても、と言って分厚い教科書を渡されても、私たちは戸惑ってしまいますが、「**わたしから学べ。**」と言われれば、まだ分かりやすいですね。その人のところに一緒にいて、そしてその人の生活ぶりを見て、その人から自然に目で見ながら、耳で聞きながら、肌で感じ取りながら、学んでいけばそれで良いからです。これ以上分かりやすい、親切な教授法、教え方というのは無いと思います。それがイエス・キリストのスタイルです。イエスのように生きること、それがあなたにとってピッタリの一番楽な人生なんだと、イエスはここでおっしゃってます。なぜなら、すべての人は**創世記の1章**によると、**2章**に書いてありますが、神のかたちに似せてつくられたと。人間は神のかたちに似せてつくられたということは、これはイエス・キリストの似姿につくられているんだということでもあります。ということは、オリジナルは、人間を造られた目的は、神の似姿に似るように生きることであってわけですので、それが本来の生き方、本来の人生、人としてのあり方です。神のかたちからはほど遠い生き方をすれば、逆にどんどん目的から反れてしまっ、何かしっくりこない、全然何をしていても満足出来ない。生きる目的も失ってしまいます。でも、神の似姿、具体的にはイエス・キリストのように生きるということを考え始めると、そのようにまた生き始めると、本当に水を得た魚のように、自分は何のためにいきているのかも分かります。そして、これから先どのような人生が待っているのかも分かります。死んでもなくなる命があるということも知ります。そこにはもちろん平安もあり、希望もあります。イエスから学ぶことについては、具体的にも**エペソ 4:17**から**32節**も是非参照して頂きたいと思います。**エペソ人への手紙**、エペソというのは今言うトルコです。**4章の17節**から終わりまでということなんですが、そこで『<sup>17</sup>**そこで私は、主にあって言明し、おごそかに勧めます。もはや、異邦人が**（異邦人というのは、ユダヤ人以外の異教徒ということです。イエス・キ

リストを信じていない人たちのことも含んでいます。)むなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。<sup>18</sup> 彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。<sup>19</sup> 道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて(ありとあらゆる性的不道徳です。もうセックスの虜ということ。ポルノ中毒ということ。)、あらゆる不潔な行ないをむさぼるようになっていきます。<sup>20</sup> しかし、あなたがたはキリストのことを、このようには学びませんでした。

(キリストを学ぶとは、どういうことか。)<sup>21</sup> ただし、ほんとうにあなたがたがキリストに聞き、キリストにあって教えられているのならばです。まさしく真理はイエスにあるのですから。<sup>22</sup> その教えとは、(具体的に)あなたがたの以前の生活について言うならば、人を欺く情欲によって滅びて行く古い人を脱ぎ捨てるべきこと、<sup>23</sup> またあなたがたが心の霊において新しくされ、<sup>24</sup> 真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした。<sup>25</sup> ですから、あなたがたは偽りを捨て(もう嘘を言うのはやめなさいと。)、おのおの隣人に対して真実を語りなさい。私たちはからだの一部分として互いにそれぞれのものだからです。<sup>26</sup> 怒っても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで憤ったままでいてはいけません。<sup>27</sup> 悪魔に機会を与えないようにしなさい。<sup>28</sup> 盗みをしている者は、もう盗んではいけません。かえって、困っている人に施しをするため、自分の手をもって正しい仕事をし、ほねおって働きなさい。<sup>29</sup> 悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。ただ、必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい。<sup>30</sup> 神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。(端的に言えば天国に行く時ということ。)

<sup>31</sup> 無慈悲、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい。<sup>32</sup> お互いに親切にし、心の優しい人となり(イエスと同じです。)、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださいましたように、互いに赦し合いなさい。』イエスから学ぶということは、こういうことだと書いてあります。これを読んで皆さんは、ちょっとヘビーだな、かなりハードルが高いな、と思ったかもしれませんが、もう一度テキストに戻って頂いて、**マタイ 11:30**には、こう書いてあります。『わたしのくびきは負いやしく(負いやすいと、英語では easy という言葉です。)、わたしの荷は軽いからです。(イエスのくびきは負いやすい。簡単だ、easy だと言ってます。』くびきというのは、先程も紹介した 2 頭の牛を横木でつなぐものでありましたが、それは象徴的な意味としては“神の教え、神の定め”と言われる律法のことでもあります。律法というのは法律のことでもあります。旧約聖書の**エレミヤ 2:20**に“神の教え”、“神の定め”、“神の律法”がくびきというような表現で描かれております。これは聞いて頂きたいと思います。

『**実に、あなたは昔から自分のくびきを砕き、自分のなわめを断ち切って、『私は逃げ出さない。』**と言いながら、すべての高い丘の上や、すべての青々とした木の下で、寝そべて淫行を行なっている。』

“自分のくびきを砕き、自分のなわめを断ち切って”とあります。要するに神の教え、神の定め、神の律法を捨てて、破って、平気で聖書の言葉に反したことをして、そして性的不道徳を行っている。これは霊的不道徳と言っても良いと思います。要するに神以外のものを愛する。霊的姦淫ということ。同じように**エレミヤ 5:5**にもこう書いてあります。『だから、身分の高い者たちのところへ行って、彼らと語ろう。彼らなら、主の道も、神のさばきも知っているから。』ところが、彼らもみな、くびきを砕き、なわめを断ち切っていました。』このような使い方によって、神の“くびき”というのが、神の教え、神の定め、聖書の言葉、律法だということが分かります。その象徴が“くびき”であります。ですから、イエスの“くびき”というのは、イエスの律法と言い換えて差し支えありません。では、イエスの律法とは何でしょうか。イエスの律法と聞くだけで、何か自分は縛られそうだと思うかもしれませんが、**ヨハネの福音書 13:34**にハッキリ、イエスの律法とは何か書いてあります。読み上げますので聞いて下さい。『あなたがたに新しい戒めを与えましょう。(くびきと言って良いと思います。)あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。』それがイエス・キ

リストが与えるくびきです。それがキリストの律法なるものです。“互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。”素晴らしいくびきですね。それは負いやすいと思います。『負いやすい』というギリシャ語は、“クレストス” chrestos といって、“必要なものを提供する”“有益になる”“ためになる”“フィットする”“厳しくないもの”“過酷ではない”“苦しめたり、悩ませたりしない”“苛立たせない”“怒らせない”という意味の言葉です。それが『負いやすい』“クレストス”というギリシャ語の意味です。イエスのくびきは負いやすい。言い換えれば心地良いということです。あなたの首に、あなたの人生にピッタリ、しっくりくるもの。丁度いい感じです。首が痛くならない、凝らない、疲れない。むしろ、イエスのくびきを負うことで必要のすべてが満たされるというのが、ここでの意味であります。

他にも第1ヨハネ5:3にこう書いてあります。『神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。』“その命令は重荷とはなりません。”と書いてます。イエスと共に歩む人生は決して重荷にはならない。負担にはならないと言っているわけです。むしろ、喜びになります。赤ちゃんはどんなに重くても重荷には感じないものであります。むしろ、重くなる方が嬉しくなります。愛する人の言う事ならば、何でもきいてあげたい。決してそれを負担とは感じないはずであります。愛があるならば、それは重荷にはなりません。それと同じことです。多くの方は誤解しておりますけれども、クリスチャンになるということは、重荷となる人生になるということではありません。クリスチャン生活は宗教制約でがんじがらめにされて、縛られる、息苦しい、堅苦しいものと多くの方はイメージしております。むしろ、重荷から解放されて、生き生きと、はつらつと、安らぎに満ちたものになるというのが、イエスの言葉であります。いわゆる宗教の様々な要求に対して、いわゆる律法主義というんですが、戒律主義、行いによって自分を義と認めようとする行為義認の生き方でありますが、そのような宗教家の教えは人々の肩に重荷だけを負わせて、自分たちは指一本触れない。人間がつくった宗教というものは皆同じであります。救いを受けるのには、こういうことをしなければいけない。こういう苦行・修行を積まなければいけないとか、お布施がこれだけ必要だとか、お祓いが、お清めがとか。まあ、いろいろなことを要求されるわけです。そのような規則や、犠牲や、奉仕で、縛り付けて重荷を負わせるのが、人間のつくった宗教です。

聖書では、“くびきを負う”ということは、弟子となることも意味します。キリストの弟子を見て欲しいと思います。くびきを負ったキリストの弟子たちはどうでしょうか。聖書を読んで頂くと分かります。彼らは決して堅苦しい、息苦しい、何かにかんじがらめにされたような、不自由な生活は送っておりませんでした。むしろ、『使徒の働き』などを見て頂くと一番良く分かりますが、使徒というのはキリストの弟子たちのことです。イエスのくびきを負った人たちは、皆解放的で自由で、たとえ理解されなくても、たとえ馬鹿にされて迫害されても、大胆にパワフルに力強く生きていました。誰も彼らを止めることすら出来ないほど、生き生きとしている、そんな彼らに出会うことが出来ます。あなたはそんな強い人になりたいと願わないでしょうか。そんな自由に解放的な生き方をしたいとは願わないでしょうか。

イエスは『わたしの荷は軽い』ともおっしゃいました。繰り返しますけれども、キリスト教はあなたをがんじがらめにして、苦しめる宗教ではありません。重荷を逆に負わせてしまう、制約でがんじがらめにするものじゃないと言っているわけです。重荷をくりつける宗教は、人間のつくったものです。むしろ、キリスト教の本質というものは、神との生きた人格的な交わりであります。ただの宗教儀式ではないと言っているわけです。イエスとくびきを共にするという人格的な交わり。イエスがどんな時でも一緒だ。現実のお方として目には見えませんが、いつも一緒にいて下さる。お話も出来る。相談も出来る。悩み事も何でもかんでも聞いてくれる。そして、苦しい時も悲しい時も一緒に泣いてくれる、一緒に笑ってくれる、寄り添ってくれる。決して孤独にはなりません。それがクリスチャン生活であります。それがキリスト教のすべてであります。教会生活が面倒に思える人もいるかもしれませんが。教会でいろいろな当番や奉仕を

することに疲れてしまうという人もいるかもしれません。もし、それらが重荷と感じてしまっているならば、それは主イエス・キリストのくびきではありません。そこには愛がないからです。重くなれば重くなるほど赤ちゃんを抱っこして私たちは嬉しくなるものですね。でも、重いと感じるならば、もうこの子の世話をしたくない、もうこんな子育てから逃げ出したい、と思ってしまうならば、もうそこには愛がありません。イエスとの愛の関係、そこには重荷という言葉は見出すことがなく、すべては軽いです。

イエスの招きをもう一度思い出して下さい。『わたしのところに来なさい。』まず第一声です。そして『わたしのくびきを負いなさい。』そして『わたしから学びなさい。』この三つの招きを是非皆さんも今イエスから個人的に語られているんだということを心にしっかりと受け止めて欲しいと思います。

『わたしのところに来なさい。』

『わたしのくびきを負いなさい。』

『わたしから学びなさい。』

それぞれの意味を説明しました。最後の『わたしから学びなさい。』の“学ぶ”というのは、日本語の古い言葉で“学ぶ”という言葉で“まねぶ”と言いました。これは、“真似る”という意味であります。昔から“学ぶ”ということは“真似をすること”物真似だと言っているわけです。イエスから学ぶ者は、イエスを真似る者。それがイエスの弟子、くびきを負う者だということであり、イエスと結ばれますと、あなたは段々イエスの似姿に変えられていきます。一緒にいるだけで変えられていくんです。“似たもの夫婦”という言葉があります。一緒にいるだけで夫婦は似てきます。何年も同じ屋根の下で時間を過ごすとお互い似てきます。嫌なところも似てきます。イエスと一緒にいると、それだけであなたは似てくるんです。何かあなたが似る努力をしなければいけないとか、何か高いハードルをクリアしなければいけないとか、課せられる様々な規約や制約に対して、全部自分が責任をもって応えていかなければいけないとか、そういう類ではありません。ただイエスと一緒にいるだけであなたはイエスの似姿に、段々気が付いたら変わって、似てくるんです。そうすると、『たましいに安らぎが来ます。』と約束されています。“肉体”ではなくて、“たましい”です。そこがポイントです。たましいの安らぎです。それは、今あなたが一番切に求めていることだと思います。どんなことがあっても揺るがない魂の安らぎがあれば、心に抱く不安や思い煩いは閉め出されてどこかへ吹っ飛んでしまいます。魂に安らぎがあれば、「今日あなたは死にます。」と言われても動じません。「あなたの命はあと三日です。」と言われても、ビビりません、動揺もしません。魂に安らぎがあれば、どんなことがあっても、すべてを失ったとしても、あなたは揺るぐことはありません。この世界が終わってしまうということが分かっても、あなたは魂に安らぎがあれば、ビビることはありません。恐れることはない。心配事も思い煩いもどこかへ吹っ飛んでしまいます。『たましいに安らぎが来ます。』とありますが、“来る”という言葉は直訳すると“見つける”という言葉です。あなたの探しているものは、イエスのもとに行くならばすべて見つかります。あなたは何を探し求めているのでしょうか。

「私は寂しいですから、人との交わり・親睦を求めています。愛を求めているんです。」イエスのもとに行けば見つけます。「この金融危機で、経済難でお金に困っています。」イエスのもとに行けば、それも見つけます。すべてのあなたの必要はイエスのもとで発見できます。究極の必要は“たましいに安らぎ”だろうと思います。死んでも恐れな。死んでもなくなる希望が与えられる。それがイエスの約束する、与える“たましいに安らぎ”です。是非、この“たましいに安らぎ”を得るために、イエスのもとに行って欲しいと思います。クリスチャンでも、ノンクリスチャンでもそうです。クリスチャンはイエスのもとに行き、自分の罪を、自分の罪の重荷をイエス・キリストが全部十字架の上で負って下さって、自分が死ぬべきところを代わりに死んで下さった。その素晴らしいニュース、それを福音と言います。それを信じて、そして確かに“たましいに安らぎ”を頂きました。

でも、そのクリスチャンでも、ひよっとしたら“魂の安らぎ”を失いかけてしまっている人もいますかも

しれません。言い換えれば、「**神との平和**」は持っています。もう天国には行けます。そういう確信があります。でも、今現実の生活の中で、直面している試練の中で、私の心には平安がないんです。」というクリスチャンがいるかもしれません。「**神との平和**」と「**神の平安**」とは全く別の種類のものです。「**神の平安**」はどんなことがあっても揺るがない「**魂の安らぎ**」のことで、でも、クリスチャンでも、それを失ってしまう人もいます。救われていれば、神との関係を持ちますから、「**神との平和**」は持ちます。でも、救われていても、クリスチャンでも、動じてしまって、動揺してしまって、恐れて、不安になってしまう人、その人は「**神の平安**」をすっかり失ってしまっている人です。その言葉として皆さんの週報に記してあるんですが、ピリピ 4:6~7 クリスチャンでも失ってしまうもの、それは『**何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。**』これは皆さんの週報にも印字した聖句であります。この『**神の平安**』と、『**神との平和**』は別のものであります。すべてのクリスチャンは、イエス・キリストが自分の罪のために十字架の上ですべて贖って下さって、罪の借金はすべて棒引きになった。代わりに弁済してもらえた。そのことを信じたことによって『**神との平和**』は持っています。つまり、罪からの救い、すべての疲れ・重荷からの解放を約束されたわけです。経験出来るわけです。

ところが、すべてのクリスチャンが、この『**神の平安**』を経験しているわけではありません。救われているのに平安がない、というクリスチャンはあまりにも多いと思います。ですから、是非覚えて欲しいと思います。地上にいる間も、イエスも疲れたということです。ヨハネの福音書の中に、イエスも疲れたという記述があります。イエスはあなたに同情出来るお方です。こんな神は他にはいません。神であるのに人となられたお方です。あなたの疲れも、あなたの罪の重荷も、イエスはすべて知っております。実際に全人類の疲れ、全人類の罪の重荷を十字架で負って下さった方ですから、あなたがどんなところを通って来ても、あなたの過去も、「この苦しみは誰にも分からない。絶対に理解されないんだ。分かってもらえないんだ。」という苦しみも、イエスは全部知っておられます。全部共感して下さい。イエスはすべての人から見捨てられた方です。罪がないのに、罪を負われた方です。ですから、あなたに一番近い方、同情できる方です。どん底まで下った方です。あなたのことを一番よく知っています。あなたのことを一番愛しています。是非このイエスの招きに応じて欲しいと思います。このイエスのプロポーズに対して「Yes」と、「ハイ」と答えて欲しいと思います。そうすれば、確実にここに約束されていること。それは、まずは『**神の平安**』。イエスを知らないならば、真っ先にそれを体験して下さい。「もう私は恐れがない。もう私は不安にならない。もう私は罪責感・罪悪感に苛まれない。もう一生疲れたままで重荷を負ったままの人生からはおさらばします。」と。「解放されたいんです。たましいに安らぎが欲しいんです。」と願うならば、イエスを自分の救い主として信じて下さい。そして、もしイエスを信じた人たちは、「心の中に全く平安がありません。いつもざわめいています。いつも心が騒いでいます。」とするならば、もう一度イエスがこの**マタイ 11:28~30** までの言葉を語ってプロポーズをして下さっていることを、しっかり耳を開いて聞いて欲しいと思います。あなたの目の前でイエスは招いておられます。「わたしについてきなさい。」と。何度でも何度でもプロポーズして下さい。有り難いことです。一昔前、『101回目のプロポーズ』というドラマがありましたね。武田鉄矢の。若い方は知らないと思いますが、『101回目のプロポーズ』どころではありません。イエスは毎日毎日私たちがイエスから目を背けて、イエスのところに行かないで何とか自分でしょうと、何とか自分の力で心に安らぎを得ようと努力をして、金を稼いで、仕事を得て、人生で成功を収めさえすれば、自分は平安になれる、たましいに安らぎが来る、これで安定するんだ、安心だと。それでも私たちは、それが騙し事であって、偽りものであって、長続きしないことを、苦々しい思いをもって後で経験します。「こんなはずじゃなかった。こんなつもりじゃなかった。こんなふうになるとは、ま

さか。」そんな大失敗をした私たちに対しても、もう一度、何度でも招いて下さいます。「わたしのところに来なさい。」遅すぎない。何度でもやり直せる。それがイエスの招きです。是非今日皆さんも、一人ひとりどんな状態にあるかはイエスは全部ご存知です。あなたの疲れの種類も全部知っています。あなたがどのような状態で、どういうところに居て、どんな重荷を抱えているのかも知っています。何があなたの必要なのかもイエスは知っています。そのイエスに是非、あなたも目を向けて、そしてそのイエスの招きの言葉に耳を傾けて、応えて欲しいと思います。「良い話でした。」じゃないんです。「ピンときません。」それでもいいです。イエスのもとにあなたが行くならば、絶対にあなたはイエスに出会います。『求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。叩きなさい。』とイエスはおっしゃってます。『そうすれば、見つかります。』とあります。“見つかる”という言葉も今日見ました。イエスが安らぎをあなたに見つけさせて下さるといふことも、これも約束されているので是非信じて欲しいと思います。では、最後にお祈りしてこの時間を閉じたいと思います。